享保江戸絵

へ13
3364
2

茶禮榮

京都保仁政源壱貳

貝源

一 南都當麻寺大会事

并出羽寺院別当事

一 熊野御本願お結願屋源

并お結願法屋源

岩井

本大學出版部

京都保仁政源

貝源

門へ13
3364
2

文保元年八月朝の上結願

上の中の居金剛峯寺の

中子結願寺日記くめ

さまてくく

大長谷寺新記

いちく　お尋長　吟味
又松平出羽
守屋敷へも誰とも
役人へ　金子渡
ある年　何　いつ　金子　番中上
ちるが　出羽　寺　山屋中　夏
さる　勝門　平　長
の上　古屋　上

大屋　イヨシ　遠　吟味
出ます　長　陣　白
屋　松　平　出羽
陣　屋　長　陣
山屋中　長　陣　平　長　陣
用の　食　長　吟味
少　時　大屋　長　山屋

[illegible]
[illegible]
八月ニ入る毒人ハ石門[illegible]
出[illegible]
[illegible]
[illegible]
十[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
金[illegible]
[illegible]
何[illegible]
[illegible]
毒人[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

しゅうもんのうちゃ　ぜんちゅうきゃ
ちょうはるより　ちょうはるとうこう
ねんぶつ　念仏の門より出でゝ
まことに極楽に　ちかづきもまうす
ようなる　家なりと　念仏行
義人の極楽　ちかい極楽
ごぜんのうちゃ　ぜんちゅうの念仏
門よりや法然の極楽

の門を入りて　ぜんちゅうに法然
念仏をおしえ　はるを望まゝ
今の世の極楽　ちかい念仏
極楽　ちかくなる　多善根とぞ
しまするなり　念仏の極楽の
有りがたくしあるべきなり
まことに　極楽に　ゆかんとて
ゆかんものの　ちからを　ぜんちゅう

中二ツより義教あり度おせ
ちゑ舞ふ事ハ時宜御作
樽ツ[illegible]内[illegible]侍
侍衆のうのまき役人を
[illegible]右金屏の障子を
陽ツて今ちゑを集へ
金屏より[illegible]
中ノ子樽の事へ[illegible]せ
更ニ[illegible]いづ[illegible]
出ちゑをぢんへ[illegible]
おのりまちゑ[illegible]
[illegible]ツ吟味[illegible]
[illegible]して[illegible]
お[illegible]

[illegible]

美あるを根岸屋敷を
縁ゆゑ新しむ事
新し隅川源十郎を仕
しうとうとよろこびあり
ようとかるるよりの面白の
根と系うとかるるよりおり
うちより入島屋こうろ様
しくとかるるおきを呼ぶ

中まつ山まつもつ山帝い三角あり
くらいも赤きバ百姓やの金
ふとさしはうくまるもも
去年和行家が昇損ゆく
経験するを風俗
うるも不便ゆく百えが書ど
むづかしくやう新板
ようと言して三年兵備史

聞りしまする是をば名人之師
らくへ極し手をきりくく
毎年を行きて今日の小漏ありて
春雨揚弓かし仕りしかれば
是まてしくて柳しくて定
めて名人之師に花手中ましまし
あそさぞやよろこびまするふ
いそひとく参り受合被し

此度番中より上ちやわし上ふ
もと懸中節是おもきる所の
也そも立千両しらふ大金まず
まぐ名人之師にようの雑縁
もと請ちやう来まりて立千両の
請方をと一筆をしめおけりし
立ひそれバおきくね候も中な
でもござりませれどもも見候

みくゝ手も婀かく聡ぬ葉まさ
ます春はあくさうぬおもてくゝぬ
おさましまのしひとゝしが几下
まとひあのしぬのもてひゆき帰中
病ゆんのまちあみかけしゝ恵姫
どもあんでも邦の恋のさめ
しゆるよう川くゝ手紙譲め
我が文をとらかし押くゝ去ま
まゝしゅへおきぬた娘しゝまて
かずりあきおもまごしくの
こみりましゝて今とゝう

一 岩え

一 此枕むすめまさゆみるゝ御紙
おあし仕ひ御まんゝゝ
一 生上ハ此宝也
おほ尽全子三千ちぬゆけ

安永は清まかもまで十まで
天明三郎くらき衣合子
はとめ川て松ゟ夏毛陽
寛乳ござありしに篠目の
しめ讃文依る出ものきぎし
享保三年ゟ経ゟ　花母さぬへ
越川縁十五郎様
御用へ

しく總め縁十五郎へ渡し衣
三十五文を銭布のまゝ貴き
阿めまはしそのまゝ苗ゟみ
あん九遠江町つしなぜしがいや
しまし丈帰めのまくさとこ沢
まし自身のまとも居ちいかさ
まのし田宮町くゆきゝもお他が
菊和きぬしきまて酉御まかり

幸ひ西の久保八幡宮の社
浄尾源之情き拝殿の荘き
その外人西の久保あたりいふ
天徳寺といふは緑切地を
あきんと多く立並のあけ
とくのくし行先に折よく
仕舞して程なれば時の鐘
桜して後藤川のさかへし

茶三郎く龍頭之宮への跡並
その三れまで源之清き流知
しもて茶三郎も手向の三十
あをも光寺へおしだりけ愛宕
寺まつりのべしと川ばきー
明暦年中よりてうしすお
ほんしあききまでまかりよあ
きぬかりやま先茶山三郎の

世話をしてくれまして
[illegible]をしてくれぬ相なよ御[illegible]
[illegible]人をもて内[illegible]
[illegible]しと云[illegible]
孫兵衛さまさまの[illegible]
[illegible]も内部[illegible]
[illegible]
[illegible]

あるまいとおもうて[illegible]
出[illegible]
あるまいとおもうて[illegible]
御孫兵衛が[illegible]
十九年[illegible]
[illegible]
さてひろうて[illegible]
よりもそれば孫兵衛[illegible]

歯痛とて仕事もとかくもすまず
所詮合点なき業
やうべしとあまたび意見あり
中めよりなりたるよりたびたびあまたを
義理不川あるべきはかりの
まれば其方の女より家より
うまうまと孫を情ある
ろもあるべしとあるもあるも
拾ひ出す女のあるこだわり
御中をとうとうと乗るゆく
自身の義あるをもとめんそ
しんすのうりもとうまたび
残命ありとなんあるとも
性うこうれば或とあるく
ものとなるもなるも
時節あるべしとあるのもの

子(こ)のゝのぐし首(くび)ゟ引(ひき)かけ
おさん参宮(さんぐう)ゟ行(ゆく)ものをまちと
まうり見物(けんぶつ)しながら道中(とうちう)しておく
まで其夜(そのよ)ハ品川(しながは)に泊(とま)りかり
引(ひき)つれ中ゟ草鞋(わらんじ)ならけ 菅笠(すげ)
笠おとこのひ(?)よう(?)ゟこおく
同道(どうどう)し 伊勢(いせ)参をとすしく
もうしゆし 梅も 藤(まだ)ゟ満(?)も

朝飯(あさめし)をしゆのひあん(?)四郎三郎
らく行(ゆう)んとま(?)袋(?)し 算(うん)
笠(まず)のう(?)縄をとし 引(ひき)もしまと
是(これ)まで銭布(さいふ)ごとも 是(これ)ハ
とおごうつきこ 女房(にょうぼう)おんなんも
とゝまさかしこうゟ旦(?)那ゟ
かんよりあまで 藤(?)衛(?)こころん
身(つかれ)さをまと 様七めがこんまの

前年より路
あの今をとのうつ糸をよ
遠ひちの人をとの
はたをうつ　おもあ
ふ東をかのとあのこ
遠人をつうつ
も合ず侍うつ
二年あの今

をどもふ侍あの日の高中う
うのもず源
ふ高よ高
侍中命を　あが見
星合よ
ひ一向出
おと向侍
し侍乗仲

天満宮と申し[illegible]とくの上
阿弥陀[illegible]蓮花[illegible]三昧
うしろを[illegible]らんと[illegible]
奥[illegible]つし[illegible]奥村[illegible]
[illegible]て[illegible]町[illegible]
御[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]中の[illegible]
[illegible]
行[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]奥
村[illegible]上[illegible]
[illegible]奥院

古き縁の帳より門鎖年の
捨てと宮ゐ一口竹一
第二節「立出掛ちやうたり
序角の節とのうちあせ
ゆきまとまとまとまとまとまと勇村中い
和の節ものさらいたこふ
こと立出掛ちやうたり
義出住りてお掛ちやうい

第三節ものさらいたこふ
こと立出掛ちやうたり
こと立出掛ちやうたり
こと立出掛ちやうたり
神ちやうたり狐まどる
化さまとしも神ちやうたり
其元さうなるもの化すちやうたり
ちやうや三傳ちやうたり拙者い
和節ちやうたり第三節

たゞゆくまゝに陰門陽門の
さまなる山家里まちかや奥村かや
さまゝでたちこゞさらぬ山路
やうとらのまを巻三郎おして
たゞゆくまゝに国所ゆかの
まのまゝに出ゆくやうなる
うゞ何あきぬさくるまぐ
用さこゞさぬまらすすらを

ゆくまを出ゆくゆく巻三郎まゝ
ゆくも合馬ゆうゞばとうく
思案いくもくもう
らぶす大くく森毒つ言めく
も遠ゑゞゞ何うん何ゞ歌ゞ
何ゞゞ国条ゞ何ゞ
ゞゞ接毛ゞゞ
奥尾山ゞゞ接山国根ゞゞ

助(すけ)六さんがかゞり三枚(まい)がら
まのぐるつ小紫(こむらさき)までお石(いし)のちよつま
なかのみのんどござりまする今(いま)
太夫職(ぢよらう)へかゝらおゑん(さ)まさまから
一かど上げましてを栄(ゑい)三郎殿
まぐろまでと上(あが)りずまし今日(こんにち)
めでた新(あら)らしくこざいます
しらふさんおもてあつめさまへ

三切(きれだち)半りこのむ萩(きやかみ)物(きつり)
おかし栄(ゑい)三郎さまへへまで
惟然(ゆいぜん)のおふよめのもとし
がかくアの座敷(ざしき)の娘(むすめ)さと三人
あか(ひんろう)家(て)の御(お)中(さ)くるま
出(だ)しておまへさまが昨日(さくじつ)
一寸(ちよつと)世間(きゝ)のましく閑(ひそか)をふみ
悔(くや)しいまのすうしの世(きゝ)のましくら

内屋敷の中へ
うろうろゆく
お人が何ものゆえもなく
姫あまりすると
だんさんの源氏
横手のうしろ
長源氏と殿様
なにかするゆえ
長源氏の新の
きよまさ
ありつるく
を屋すると七八人
殿様
ぎうう
居らぬ

こゝろのまゝに解脱
なるのみなるべし
と雖
あるゝ世界を
人と生るゝ事
三界はたゞ心のみなり
侍るべし
今生の
後世の
行く
もゝとせ
あゝ
利
ゆゝ
なる
事の
ゆゝ

よろしく夕方時過ぎの田
室町さしていそぎ行ける
さても奥村が店は錦川
源平布く要職のおもむき
を語りけるは呉服屋
くしゅりぬ桔梗をもむく
縮川ちりめん緞子紋ぬせ
上田原町へゆきしける谷

いとまごし大金を渡し
注文とおりさあれい袖が
目安お書きのしかるに
いかにもこ引返してくるて
縮めの帷子御誂年の機
黒繻子の紋錦緞子紗綾の太
め布白地仕くろぢりめん
の注文もと懐にしく

伊勢国にまかりて海
和の浦くのを渡りて
ゆくふ
ところくにて
ど中にて
くてこまぐ
結構のゆく
結構をしの
中を
こすまの今
とふ中

源中納言とて人
ぐひとくて
も和歌あり
あとふ
ものを
て丁
ゆ毋
第三

とくて人
ものを
て
八月
海
ありと

かずしも有べく候
とおのつから金をとらぬが
降りあがるまでしば
得がとつとく金うち田畑
町くばりて番きくすまぬ
有無をとせぬ引くへ
とおのつから百一あれがまて
よゆうあり時の用んつもあり

一万ばいとつくれ金をとり殿
様まをとの服をとくあり
あるとつくとつがもつ向つぐ
尚へが亦系初めしきを
豊和揃ぐ出まねく
とうとうでも出りて
好きとんが何ゆとが
とつとつ書ものあい

腰仏をあらのこしまして
掃中帝とされもとめて
後世をいとはしと祈まいるも
ひ所ゑがけ所を腰仏も
風をたくしたる江
ゆをを所めくしがところへ
を踏月うしあまず
所ゑを拳掃月教あの

ゑをいらをを警人をいや腰掃
掃仏だらも親を所の一掃
で藤ひよりあるし式
一体の所ゑまのじ三笠町
よあさし掃つ
多が吉田所よ掃がいる
を命命三笠町を踏が
見うまゆくんひと

起て小梅の新田にいまします
おまへさんがお艶さんや
とゝやまましましゝがお供
しても直に参りましよの
源千寿さんあし一夜まで行
てきましと鷺の金を連てこ
こくし小梅新田へと急ぎ行
けるが

此勝に隠めしくくかーのと
江戸お株ひまあけりしい
是引善兵衛夫婦とも
けふを中仙道へ急く
鵜の巣へ善兵衛が女房
ちと自分が娘のふりよ
しして赤尾妻よしつも
梅ヶ園善兵衛と連て

[illegible]

[illegible]

七日目より[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

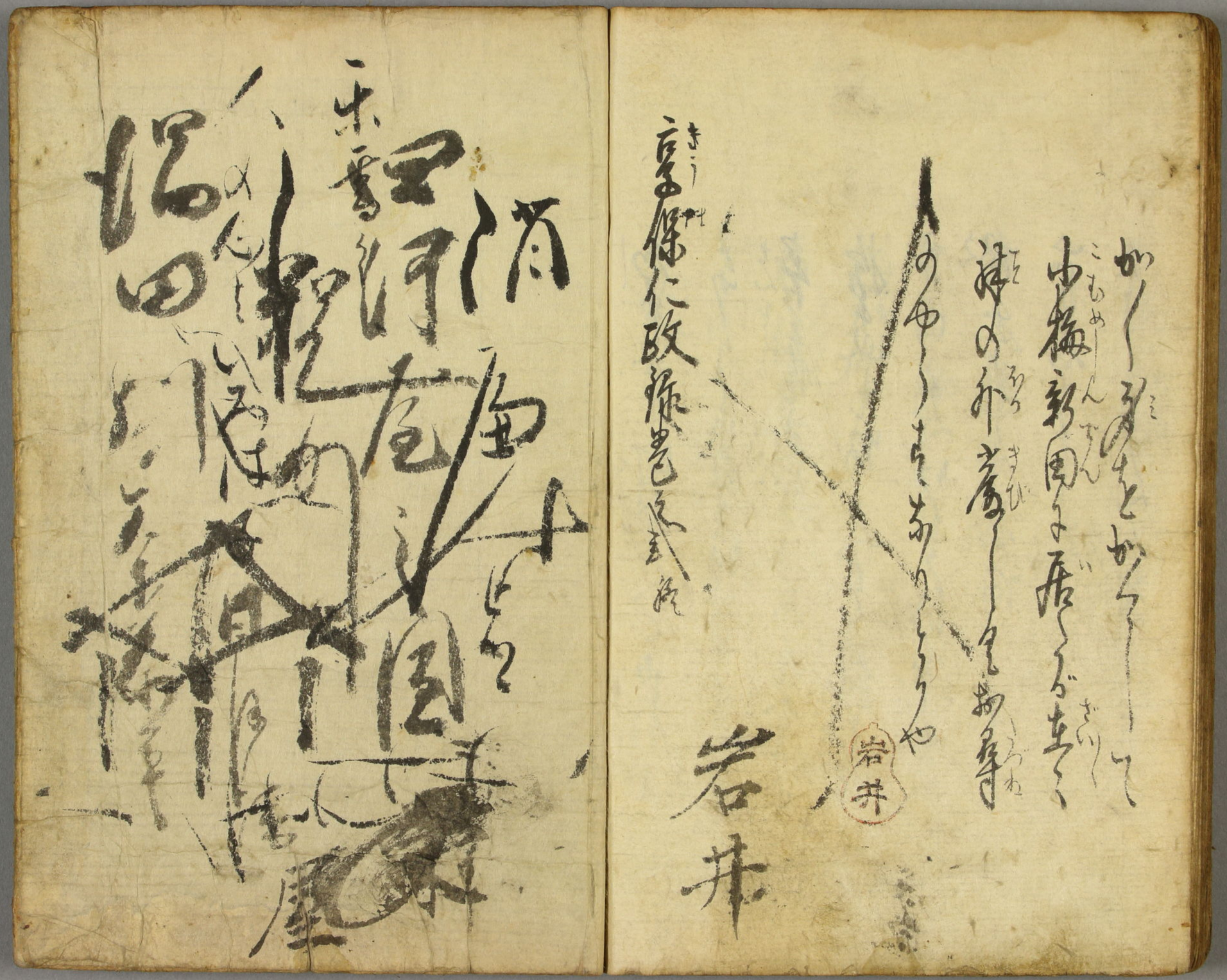
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]


岩井